

韓国語に流入した日本語調用語に関する考察

－ 『日本語調用語の純化資料集』を中心に－

崔延伊(忠南大学校)

1. 研究の目的

光復以後、国語純化運動が着実に続いてきたにもかかわらず、日本語調用語はまだ私たちの生活の中で多く使われている。実際、2016年、一年間でNAVERの国語辞典利用者が最も多く検索した新造語が「ツンデレ」であると集計されたが¹⁾、これは、ツンと澄ました姿を表す日本語の擬態語で「ツンツン」と「デレデレ」が合わさった言葉だ。日本のアニメやゲームの中で主に使われたが、最近は日常生活の中でも広く使われている。このように、最近も続いている日本語調の使用に国立国語院を中心に国語純化運動も続いている。

本研究では、国語純化運動が実際の言語生活にどれだけ適用されているかをポータルサイトのインターネット記事を中心に把握し、日本語調用語と純化語の使用実態および原因を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

韓国語に流入した日本語調用語に関する先行研究としては、カン・シンハン(2002)、キム・スンイム(2009)、ホ・ジェヨン(2015)、イ・ドクベ(2011)、ファン・ヨンギル(2017)、アン・チャンウォン(2017)などがある。

カン・シンハン(2002)は、日本語調の純化における問題点について、純化は成功しているが、韓国語の固有語が少なく、純化語が一般大衆の間に根付いていない場合があると指摘している。

キム・スンイム(2009)は『日本語調用語の純化資料集』(2005)に収録された1171項目を純化度および語源によって漢字語、純粋日本語、外来語に分類し、資料集に提示された純化度の基準とその妥当性を再考し、純化政策の改善が必要だと指摘した。

ホ・ジェヨン(2015)は、国語純化政策の歴史を政府レベルで行った「告示」を中心に調べ、その結果から算出された純化語資料の問題点を指摘している。純化資料が作られた背景や意図が同一でないことと、繰り返される純化語告示によって重複した用語が多いということを指摘し、改善の必要性を提起した。

イ・ドクベ(2011)は、韓国語に残存する日本語の実態調査のため、20代の大学生を対象に日本語調用語123項目についてアンケート調査を行い、その結果、調査範囲内で男子学生と女子学生の間に有意義な違いは見つからなかった。また、兵役済みの男子学生が、まだ兵役を経験していないの学生に比べて、日本語調の表現をより多く知っていたり、使用していないことが分かった。

アン・チャンウォン(2017)は、小学校教科書に現れた日本語調の使用様相を分析した結果、教科書に現れた日本語調の漢字語の中には『日本語調用語の純化資料集』(2005)で、必ず純化として提示されたものが含まれており、純化語の使用の必要性を提起した。

これらの先行研究は、主に日本語調用語の分類や分析、認識調査、日本語調用語資料集の問題点を指摘したものがほとんどであり、本研究のようにマスコミ記事を対象に実際の使用例を分析した研究は多くない。したがって、本研究では『日本語調用語の純化資料集』(2014)に提示された日本語投資語と純化語がポータルサイトのインターネット記事で実際にどのように現れているのか2015年と2020年それぞれ1年間の資料を通じて分析しようと思う。

3. 研究方法

本研究は、キム・スンイム(2009)を参考に『日本語調用語純化資料集』(2014)の用語を次の[表-1]の

1) 2016年12月27日付の毎日経済記事「今年ネイバー国語辞典検索1位の新造語は「ツンデレ」。
(<https://www.mk.co.kr/news/it/view/2016/12/893349>/検索日-2016年12月30日)

ように分類して研究を進める。最も最近の純化語資料集である『日本語調用語純化資料集』（2014）に収録された1,157項目を流入した形態と資料集に提示された純化度によって、第一、日本漢字語、第二、純粋日本語、第三、日本式外来語、第四、韓国語と日本語が結合された混種語に分類し、混種語は韓国語と純粋日本語の混種語、韓国語と日本式外来語の2種類に分けて分類した。

[表-1] 国立国語院(2014) 収録用語の流入形態及び純化度による分類

純化度 流入状態	必ず純化	できるだけ 純化	併用	合計
漢字語	103	233	96	432
純粋な日本語	476	5	0	481
外来語	192	11	2	205
混種語(韓+日)	32	1	2	35
混種語(韓+日外)	4	0	0	4
合計(計)	807	250	100	1,157

上記のように分類した日本語調の用語と純化語が2015年1月1日から2016年1月1日までの1年間、2020年1月1日から2021年1月1日までの1年間に作成されたポータルサイト(NAVER, Daum)のインターネット記事で実際にどのように使われており、どの流入形態がより多く使われているのか、日本語調用語と純化語のどちらがより多く使われているのかをそれぞれの使用頻度数を調べて分析し、『日本語調用語純化資料集』に収録されている日本語調用語と純化語の特徴を考察する。

4. ポータルサイトに現れる日本語調用語と純化語使用の実態

上記のような方法で2015年と2020年にそれぞれのインターネット記事に示された日本語の使用語と純化語の使用実態を分析した結果をまとめると、次のようになる。

4.1 漢字語

漢字語で入ってきたのは「入金、翌日」など計433個で、必ず純化103個、できるだけ純化233個、併用96個で分析した結果、必ず純化103個の中で、純化語がさらに多く使われるのは2015年83個、2020年78個であることが分かった。だが、できるだけ純化の項目では「おやつ、割引」等、半分以上が日本語調の漢字語がより多く使われた。なるべく純化の項目では、223個のうち、日本語調の漢字語がより多く使われたのが2015年132個、2020年131個であることが分かった。併用も同様に96個のうち、日本語調の漢字語がより多く使われた用語が2015年76個、2020年77個であることが分かった。

日本語調用語と純化語が同じ回数で使われたり、両方とも使えなかった場合があった。2015年にはできるだけ純化で同じ回数で使われたものが1個、併用で両方とも使わなかったものが1個であることが分かった。2020年には同じ回数で使われたものはなく、どちらも使われていないものが必ず純化から4個、なるべく純化から3個と現れた。

そして「十八番」の純化語として提示されたのが、「常連の将棋、常連の歌」だが、これは両方とも20回前後の低い頻度であることに比べ、「愛唱歌」の場合、2015年2792回、2020年2780回と現れ、他の用語がより広く使われる例の一つだ。

4.2 純粋な日本語

純粋な日本語として入ってきたのは、計480個で、純化度は必ず純化が476個で、できるだけ純化5個、併用はなかった。分析の結果、日本語がそのまま入ってきた用語が純化語より多く使われる場合は少なく、今はほとんど使われていない用語がほとんどだった。2015年基準で19個、2020年基準で31

個を除いては純化語がさらに多く使われた。日本語がそのまま入ってきた用語が純化語より多く使われる場合は「モナカ、そば、うどん」など主に食べ物の名前であることが分かった。純化語と似た水準で多く使われたものとしては「干支、餅、刺身、寿司、わさび」などがあった。

同じ回数で使われたのは、2015年必ず純化で3個、2020年必ず純化で2個、両方とも使わなかったのは2015年必ず純化で5個、2020年必ず純化で51個と大きな差を見せた。ここで、二つとも同じ回数で使われたり、日本語調用語が多く使われたのは「ナメ（軽くたたく<ビリヤード>）」など特殊な環境で使われる専門用語がほとんどであった。

一方、「おでん」の純化語として提示された「串(つまみ)」は「おでん」だけを特定する言葉ではないため、「串(つまみ)」は「おでん」の純化語として適切ではないと思われる。普通「おでん」の代替語として多く使われる「おでん」で検索してみた結果、「おでん」が2015年基準で1,595回現れたのに比べ、「おでん」はほぼ10倍に近い11818回という結果が出た。このようなことも純化語の問題点の一つだと考える。

4.3 外来語

日本式外来語として入ってきたのは計205個で、項目別にみると、純化度は必ず純化が192個、なるべく純化が11個、併用は2個と分析した結果、必ず純化では「コロッケ、サッシ」など2015年10個、2020年13個を除いた残りで純化語がさらに多く使われることが分かった。しかし、純化語が少なかったり、全く使われない場合があった。その原因として第一に、日本語調用語と純化語の両方が今はあまり使われていない用語であり、代わりに他の用語が広く使われている。第二に、英語外来語として入ってきた場合と重複して押し出されたためだと見られる。

同じ回数で使われたのは2015年にはなく、2020年に4個であることが分かった。どちらも使わないのは2015年必ず純化で13個、2020年必ず純化で11個と現れた。

4.4 混種語

韓国語と日本語の混種語は「モチ餅、電気タマ」等の計35個で、項目別では、純化度は必ず純化が32個、なるべく純化が1個、併用は2個、韓国語と日本外来語の混種語で入ってきたのは計4個で、純化度は必ず純化が4個で、できるだけ純化と併用はなかった。分析の結果、2015年と2020年にそれぞれ1つを除いては全て純化語が多く使われることが分かった。

同じ回数で使われたものはなく、両方とも使わなかったものは2015年、2020年とも項目別にみて、必ず純化で5個ずつ現れた。

韓国語と日本式外来語の混種語として入ってきたのは計4つで、純化度は必ずしも純化だけで4つで、できるだけ純化と併用はなかった。4つの項目の中で純化語が多く使われるのが2015年3つ、2020年2つであることが分かった

そして、今は純化語の「保温びん」として広く使われている「魔法瓶」は、2015年基準で頻度が0回であるのに対し、2020年基準で91回に増えた。これは最近、昔の思い出を楽しむレトロ感性の流行で、企業が関連商品を発売し、主に昔使っていた日本語調用語が再び言及され頻度が増えたという例である。

〔表-2〕 2015年、2020年 全体の比較表

純化度 流入状態	日本語調の用語						純化語					
	必ず		できるだけ		併用		かならず		できるだけ		併用	
調査年度	15年	20年	15年	20年	15年	20年	15年	20年	15年	20年	15年	20年
漢字語	20	22	132	131	76	77	84	78	100	99	19	19
純粋な日本語	16	27	3	4	-	-	412	396	2	1	-	-
外来語	10	13	5	5	1	1	167	164	6	6	1	1

混種語 (韓+日)	1	2	1	0	2	2	26	25	0	1	0	0
混種語 (韓+日外)	1	0	-	-	-	-	3	4	-	-	-	-
合計	48	64	141	140	79	80	692	667	108	107	20	20

本研究を通じて全体的に漢字語に入ったのは、日本語調用語が多く使われる様相を見せ、純粋な日本語や日本式外来語は大部分が純化語や他の語彙に代替されて使われていた。特に純化度が必ずしも純化である用語は、日本語調用語と純化語の両方とも使われない場合が多かった。前で分析した結果をまとめると、[表-2]のようになる。

前述の分析による日本語調用語と純化語の使用実態を[表-2]のようにまとめた結果、5年という時間が経ったが、全体的に大きな変化を見せていない。前述した「魔法瓶」のように流行によって突然頻度が変化した日本語調用語も存在するが、これは少数で、ほとんどが変化がない姿を見せた。

5. 結論

本研究は『日本語調用語の純化資料集』（2014）の日本語調用語を分類し、2015年と2020年のそれぞれ1年間ポータルサイトのインターネット記事でどのように使われているかについて分析、考察した。これを通して、現在も続いている国語純化運動にもかかわらず、生き残っている日本語調用語の実態、および原因を明らかにすることが目的であった。その結果、全体的な使用実態は大きな変化を見せなかった。しかし、社会の雰囲気の変化によって再び使われる語彙が一部存在した。これを通じて、現在は使われていない日本語調用語や純化語がたくさんあることが分かった。このような分析結果を通じて共通して現れた純化語資料集の問題点は次の通りである。

第一、純化語が圧倒的に多く使われており、日本語調用語も全く現れなかったり、少し現れる場合は、すでに純化語や他の代替語彙が広がっていることがほとんどであるため、最新の純化集には載っている必要性がないと思われる。

第二、純化語が少なく使われる場合と多く使われる場合、いずれも問題点が存在している。単純に純化語より日本語調用語がより広く使われていることもあるが、純化語が使い慣れなかったり、不便で、本来の語彙の意味と合わない純化語である場合もあった。純化語がより多く使われた場合にも純化語の意味が広範囲で頻度が高く出たり、本来の語彙の意味と合わないものがあった。

最新の純化語資料集に不要な語彙を取り除くためには、各語彙の認知度、理解度、使用率を調査するなどの事前調査と純化語選定方式の改善及び新しい最新の日本語調用語の追加が必要と考える。本研究の限界としては、アンケート調査等を通じた日本語調用語の使用実態および語彙理解度調査が不足していたということで、これは今後の研究課題とする。

（翻訳責任者：吹上淳子）